

「自表―じひよう―」

作 サカイリユリカ

登場人物

- 男 社員。敏夫と芳子の一人息子。西崎芳広。  
父 西崎敏夫。記憶の中の人物。男が幼かったころ、  
首吊り自殺した。  
母 西崎芳子。現在、「まあぶる」にて生活する。

〈希望の家「まあぶる」の人たち〉

- 多映子 芳広の父・敏夫の姉。希望の家「まあぶる」の運営者。  
ミソラ 歌が好きな中年女性。昔、一家心中の末生き残った。  
スミ 書道が趣味の中年男性。元ホームレス。  
れんず 自殺志願者の若い女性。  
彼氏が事故死し、後追い自殺しようとして自殺の名所にやってきた。  
えふで 彼氏（裕介）が好きだったカメラを持っている。  
学校でいじめにあっていた男子高校生。  
絵を描くことが好き。

舞台美術

舞台中央から下がった、丸い輪っか。

舞台中央、天井の高いところから紐が下がっており、その紐の先は輪っかになっている。後ろの壁には、紐の影が大きく映りこんでいる。

電車の音。

男、板付き。紐を電車の吊革のように握って立っている。たくさんの輪っかが後ろの壁に影として映る。

男、立ちながらこくり、こくりと眠り始めている。

次第に大きくなる電車の音。

車内アナウンスが聞こえてくる。

「まもなく、終点です。まもなく、終点です」

男、その声にびくつと反応し、重い身体を引き摺るように歩きはじめる。沈黙。

ふと、後ろを振り返る男。

輪っかが揺れている。

父親が首つり自殺した現場のフラッシュバック。

男　　父さん？父さん・・・？

　　なんだなんだ次は幻覚か

　　毎日、朝が来ると絶望が始まる。

　　太陽がまぶしかったから、人を殺しました——そんな小説があったな。今なら分かる。

　　人じゃなくて、俺が殺してしまいたいのは・・・

男のもとに電話がかかってくる。多映子が舞台上に現れる。

多映子　よしくん。元気？多映子です。

男　　おばさん

多映子　あのね、大変なの　お母さんが

男　　連絡してこないでくださいって言ったじゃないですか

多映子　あんたね、とにかく来なさい。

男　　何だよ　またいつもの発作だろ

　　いちいち呼び出されてたらキリねえよ

だいたい、もう任せると言いましたよね

多映子 お母さん、とつてもあなたに会いたがってるの。

男 俺が行ったっていかなかったって勝手に騒いでそのうち落ち着くだろう  
多映子 ちよつと顔見せるぐらいしなさいよ。

ねえ、よしくん、あたしはただ芳子さんに生きてほしいの  
それだけのなの、ねえ、もしもし

男 ・・行くよ。

多映子 え？

男 だから、行くつて。

多映子 よしくん？よしくん・・

男、電話を切る。

男 辞めるか？会社。人生、辞めるか？

・・辞めだ、辞め。

### 【1場】

都会の喧騒から離れた、田舎の山の中腹。

一軒の古い民家が建っている。

建物は2階建てであり、周囲の自然に溶け込むようにひっそりと佇んでいる。

玄関の扉の横には、「希望の家 まあぶる」と表札が出されている。

庭先で男の母・芳子と伯母の多映子が、男を待っている。

男、だいぶ歩いてきたのだろうか、汗をぬぐいながらまあぶるにやってくる。

芳子 よしひろ・・・

男 元気そうじゃん

芳子 よしひろお

男 なんだよ、泣いてちやわかんねえよ

芳子 よかった あんたまでいなくなっちゃったのかと思った

あのね、起きたら誰もいなくて・・・！

男 俺はいなくならないよ

芳子 あんたにまでいなくなれたらあたし・・・

多映子 芳子さん、落ち着いて、深呼吸深呼吸

芳子 夢だったの でも夢じゃないかと

だってあたしの前で・・両脚が・・

芳子、小さく絶叫する。

多映子、無言で芳子を抱きしめ、背中をさする。

芳子、次第に呼吸が落ち着いてくる。

芳子 ……ごめんね 仕事 休んできてくれたの

男 ああ

芳子 ありがとうね

多映子 芳子さんね 今日は大いぶいのよ  
ね？

芳子 お陰様で ほんと、義姉さんにはお世話になりっぱなし

男 これからも、よろしくお願いします

多映子 やだ、何よ 改まっちゃって

まあまあ、ここまで疲れたでしょうし、

今日はゆっくりしていきなさい

芳子 もうすぐ食事の時間なの 母さんも一緒に作ったのよ

さ、行きましょ

男 いや、俺はもう帰ります

母さん、元気だな

男、その場を立ち去ろうとする。

芳子 どこ行くの！！

男、芳子の剣幕に押されて立ち止まる。

男 帰るんだよ 明日も仕事あるし

多映子 もう麓のバス 終わっちゃってるわよ あきらめて泊まっ  
てきなさい

芳子 どうせ毎日、ろくなもの食べてないんでしょ

食べてきなさい

男、芳子と多映子に抱え込まれるようにして、

「まあぶる」の中へと連れていかれる。

「まあぶる」は玄関入ってすぐが居間になっており、

奥にまだ部屋があるようだ。

居間では「まあぶる」の住人が各々好きなことをしている。

鼻歌を歌いながら書き物をする中年女性、半紙に墨汁で何かを書いている中年男性、写真を何枚か床に広げて見ている若い女性、キャンバスに向かつて絵を描いている若い男性。

ミソラ お帰りなさい

多映子 たいま

ミソラ あら、どなたさま・・・？

芳子 ほら、今朝言ったじゃないですか 私の

スミ もう忘れちまったのかミソラさん！しょうがねえなあ！

れんず 多映子さん、おなかすいた

多映子 ああ、ちよつと待ってね

ご飯にしますよ皆さん

スミ おい 飯の時間だつてよ

えふで あ、はい

スミ おお、今日も綺麗に描けてるじゃねえか。さ、手、洗ってきな

えふで はい

えふで、洗面所に向かう。

多映子、奥の台所へと向かう。

芳子 ちよつと私も 手伝ってくるわね

芳子も、台所へ向かう。

多映子、大きな鍋を持ってくる。鍋からは湯気が立ちのぼり、部屋中美味しそうな匂いで充たされる。

多映子 みんな、今日はね、ポトフを作りましたよ

スミ うまそう

多映子 お皿持ってきて、あとスプーン

芳子、食器を持ってくる。

男は玄関に突っ立ったまま所在なさげにしている。

れんず この人は

多映子 後で紹介する ほら、準備準備

スミ 今日のごちそうだな  
多映子 やめてよ いつも質素みたいじゃない  
スミ 若い男が来るからって はりきっちゃって  
ミソラ あら いいにおい 多映子さんまた随分ハイカラな料理ね  
スミ 俺も食ったことねえ なんだって  
えふで ・・・ポトフです  
芳子 あのね、このこは  
多映子 待って待って、とりあえずみんな座って 話はそれから  
男 ほら、よしくんも 座る  
男 はあ いや俺はもう  
多映子 ほら 座る  
男 はい

男、多映子の勢いに押されて座る。  
多映子、手際よくポトフを各自の皿に取り分ける。

れんず おいしそう  
えふで ありがとうございます  
スミ なんだか 冬の炊き出しを思い出すなあ  
こう、湯気が立ちのぼって・・  
芳子 ほら、よしひろ あんたの分  
男 あ、ありがとう  
多映子 さ、じゃあ今日も一日に感謝して。  
「いただきます」

ミソラ いただきます  
えふで いただきます  
スミ いただきます  
れんず いただきます  
芳子 いただきます  
男 ・・・いただきます

静かに、黙々と食事をとる住人たち。  
ミソラ、まるでかきこむようにしてポトフを食べ、むせる。

えふで 大丈夫ですか  
多映子 ミソラさん、お水お水

れんず 駄目ですよ 早食いしちゃ

ミソラ

(咳き込みながら) ごめんなさいねまたやっちゃった

わたし家が貧乏で、お弁当って言ったたらごはんに梅干しだけ、ほんとに日の丸弁当ね

それ見られるのが恥ずかしくてねつい癖で、

スミ それ聞くの10回目だな

芳子 そういうスミさんだって、早食いですよ

スミ 他の奴に横取りされちまうからな

多映子 ここでは横取りする人なんていないんだから

ゆっくり食べていいのよ

どう、よしくん？おいしい？

男 ああ、はい

芳子 みんな、改めて紹介するわね

私の一人息子、芳広です。

男 あ、どうも、はじめまして。母がお世話になってます

住人たち、それぞれ、会釈する。

ミソラ 似てるわねえ 芳子さんに

芳子 あら そうかしら

スミ よしひろ、くんね よろしく

俺は、隅っこ暮らしのスミだ！良い名前だろう

多映子 スミさんはいつもその冗談言うのよね

この人は、書の先生なの！

墨で色々なカクゲンを書いてくださるのだよ

ミソラ しかもとても字が上手なのよ

スミ やめてくれえい！センセイなんでもんじや

センセイといたらこっちの師匠だろ。よっ！ミソラさん。

ミソラ はじめまして。芳子さんにはこちらこそお世話になってます

多映子 ミソラさんの歌、素敵なんですよ

ミソラ やだはずかしい

スミ なんてったってあの美空ひばりも目じゃないからな！

住人たち、笑いあう。

男 皆さん、不思議な名前ですね ニックネームですか

芳子 名前はね、多映子義姉さんがつけてくださったの。  
多映子 そう、皆それぞれ特技や好きなことがあるから、その名前にちなんで。  
その、若い2人は、れんずちゃんと、えふでくん。  
えふで あ、よろしくお願い致します  
れんず よろしくお願い致します

間。

男 ごちそうさまでした

芳子 全然食べてないじゃない なに、嫌いなものあった？

男 いやあの、俺帰るから

えふで あの、危ないと思います

男 え？だってまだ19時でしょう

スミ 夜の山をなめるんじゃないよ 都会とはわけが違うんだからさ

多映子 そうよ ここまで来るの結構かかったでしょ？

夜道は危険だし、今日は泊まっていきなさい

芳子 そうよ 義姉さんもそう言ってくれてることでしょ

ミソラ うふふ、よし、そうと決まれば

母と息子の再会を祝して一曲歌っちゃいます！

スミ お！いいねえミソラさん！待ってました！

ミソラ ♪あなたにく 会えたこと

世界が 祝福してる 笑顔咲く

芳子 なんだか恥ずかしいわ

多映子 いいじゃない

ミソラの歌を聴く住人たち。スミは口笛を吹き、れんずは手拍子をし、えふでは体を揺らしている。

男 皆さん ずいぶんお元気ですね

男、携帯電話を取り出す。

多映子 あ、ここね、電波入らないから

男 え

多映子 気づかなかった？

男 ほんとだ・・え、じゃあ



多映子 固定電話は一応引いてあるのよ ほとんど使わないけれど  
男 はあ

ミソラ、歌いながら調子が良くなったのか嬉しそうにくるくる踊り出す。  
それに合わせて周りの住人も笑顔で楽しげである。

芳子 敏夫さん・・・

歌声と歓声がぴたりと止む。

多映子 芳子さん、どうしたの  
芳子 敏夫さんが。そこに。

芳子の指さした先には、天井からぶらさがった輪っかがある。

多映子 敏夫、いるの

芳子 います。きっと芳広に会いに来たのね・・・

敏夫さん、今日は芳広がきたんですよ・・・

男 母さん

芳子 ねえどうしてなにも話してくださらないの

ねえ、あなた、ねえ・・・

突如泣き崩れる芳子。

多映子とミソラが駆け寄り、背中をさすってやる。  
れんずとえふでは、静かに食卓を片付け、台所へ行く。

スミ 風呂。入ってくるわ

スミ、風呂場へ向かう。

多映子 だいじょうぶだからね、芳子さん。なんにも心配いらなのよ。  
我慢しないでいいから、たとえ泣きなさい。

ミソラ 今、おふとんしいてきますから

ミソラ、奥の部屋へと向かう。

男 いつもこうなんですか

多映子 波があるのよ ビックリした？

男 いえ 一緒に暮らしてた時も 時々なつたので

こんなのは初めてですが

多映子 帰らないでいてくれるよね？

男 ……

多映子 ……もう寝よう。

皆さん、消灯時間です。

れんず はい

えふで すみません ぼく お手洗いに

れんず わかりました

れんずとえふで、何故か連れだつてお手洗いに向かう。

ミソラ、奥の部屋から、

ミソラ お布団、敷けましたよ

多映子 ちよつとよしくん、手伝つて

男 はい

多映子と男、脱力している芳子を奥の部屋へと運ぶ。

ミソラ 泣き疲れちゃったのかしらね

まあでも大丈夫よ

息子さんの分も、敷いておいたから

多映子 ありがとう、母さん……

男 え

多映子 何でもないのよ ミソラさんももう休んで

ミソラ ええ

れんずとえふで、戻ってくる。

えふで あの、スミさんがお風呂に

多映子 私が見とくから大丈夫 もうおやすみ

えふで ありがとうございます。おやすみなさい

れんず あの、この方も私たちと同じところで寝るんですか

多映子 さすがに私と同じ部屋つてのもね

れんず ・ ・ わかりました

男 もう寝るんですか

多映子 夜になったら寝るの。眠くなくても明かりを消すの。

えふで どうせやることないですから

れんず ここ、テレビもないし

多映子 疲れただろうから、横になってればじきに眠れるわよ

じゃ、電気消すわね おやすみなさい

多映子、部屋の電気を消す。

それぞれ、同じ部屋に布団を敷き、就寝する。

男、一番端のふとんにごろんと横になり、天井をみつめている。  
スミが部屋に入ってくる。

スミ どうした 落ち着かないか

男 はい、まあ・・

スミ 都会はうるせえもんなあ、夜でもそこから中明るいし

男 ここは静かすぎます

スミ じきに慣れるよ ぐっすり眠れるさ

男 はあ 皆さんいつもこんな時間に寝るんですか

スミ そうだな 規則正しい共同生活ってやつよ

男 ・ ・ おばさん ・ ・ 多映子さんは

スミ 多映子さんの部屋は2階。

— けど俺らは上がっちゃいけないことになってる

まあ別に用もないしな

おやすみ

男 おやすみなさい

全員、寝静まる。

静まり返った闇の中、ぼんやりと天井からぶらさがった紐の輪っかが  
浮かび上がる。

【2場】

男はこつそりと寢床を抜け出し、居間にあつた椅子を持ち出すと、静かに外に出る。

手にはロープを持つている。

「まあぶる」の庭先にある木を見つけると、その下に椅子を置き、椅子の上に立って太い木の枝にロープをくくりつける。

気が動転しているのか、何度もほどけては結び直し、を繰り返している。

やつと、ロープを結び終わると、そこには首吊り用の輪っかが出来ている。

男、イスの上に立ったり、降りたりをひたすら繰り返している。

時々、イスを蹴飛ばしたり、かと思えば、イスの上に突っ伏したりしている。

が、意を決して男、椅子の上に立ち、輪っかに首を通す。

ふと、誰かの視線に気づき「まあぶる」の方を向くと、芳子が呆然と佇んでいる。

芳子 なにしてるの・・

男 母さん

芳子 敏夫さん・・

男、芳子から目を反らし、勢いよく椅子を蹴る。

——が、ロープの結び方が甘かったのか、そのままどしんと音を立てて地面に落下してしまう。

芳子 (我に返り) よしひろ・・・!

男 くそ・・・くそ・・・なんで、

落下音で目を覚ましたのか、住人たちがこぞって玄関から出てくる。

先頭に多映子がいる。

多映子 怪我はない

男 え

沈黙。

多映子 あんた、見せたかったの

男 え  
多映子 お母さんに  
男 そういうわけじゃない  
多映子 なら？  
男 ・・・もういいだろ  
多映子 なにが  
男 うんざりだ。  
自分で自分に飯食わせて、風呂入らせて、眠らせて、起こして、働かせてさあ。そういうの疲れたんだよ  
多映子 ゆっくり休めばいいじゃない  
一回全部忘れて、ここで・・  
れんず ここで死なないでくれる  
男 え  
れんず 人んちの庭先で 迷惑よ  
多映子 れんずちゃん  
れんず だつてそうじゃない  
スミ よしひろくん、だっけか  
普通はそんなロープ 持っていないよな  
男 ・・そうだよ 俺がここに来たのは  
自殺の名所だつて知ったからだよ  
会社に辞表だしてきた アパートも解約した  
最後に母さんにあつたら そのまま  
芳子 よしひろ・・・  
男 お守りみたいなものだよ そのロープ  
いつでも首くくれるつて思ったらちよつとラクに  
多映子 試したの  
男 試してそのまま逝つてたら良かったのにな  
スミ なんて今なんだよ さつき芳子さんの発作みただろ  
男 朝なんて来てほしくないからだよ！

ミソラが唐突にバースデーソングを歌い始める。

ミソラ

♪ハッピーバースデー トゥーユー

ハッピーバースデー トゥーユー

ハッピーバースデー デイア よしひろくん

ハッピーバースデー トゥーユー

多映子、拍手をする。

多映子 よしくんは産まれ直したんだよ

今日 今 違う

男 死にきれなかったただけだろ

多映子 命拾いしたの だから今日は第2の誕生日

男 おいおいなんだよそれ なんなんだ 希望の家って 何が希望だ

NPOとかでもないんだろどうせ

多映子 ただのおばさんの道楽よ

男 道楽で人の命なんて救えんのかよ

お前らも みんな どうせ同じだろ

だったらいっそみんなで 死ぬか

この家ごと 集団自殺

希望の家で心中事件

幸せになれるんじゃないのか その方が なあ 違うか

心の中でね、全員仲良くあの世にいけるわけじゃないのよ

そんな幸せなこと あるもんですか

多映子 ミソラさん

罰だと思った 生きていくっていう罰

でも

多映子 罰なんかじゃないの

ミソラ 多映子さんはそう言ってくれるけど

あたしはうまく生きていける自信はない

だから一緒に暮らしてるんじゃない

男 みつともなくないんですか

俺は・・・こんな・・・

スミ プライドがあるうちはまだいいさ

そのうちどうでもよくなる

男 あんたおばさんにお世話になってよくそんなこと言えますね

あれか 情性で生きてるとでも言いたいのか

スミ 情性なんじゃないのか

多映子 いいのよ なんだって。生きてりゃ

れんず 生きててくれればよかった・・・！どんな姿になっても

男 ゆうくん、あたしたちずっと一緒だよねって言ったのに・・・！

れんず ホントにどんな姿になっても愛せるのかよ？

愛せるよ。でもお話できないのはつらい。

だから、ゆうくんのとこにいきたいって思ったの  
気づいたらこの山にいた

男 　　で？保護されたのか？

れんず 　　何よ！何も知らないくせに！

多映子 　　れんずちゃん、落ち着いて。ね。

男 　　声かけられたくらいで思いとどまれるんなら

そいつはそれくらい覚悟しか

芳子 　　それは違う、違うのよ芳広・・・

男 　　もうほつといてくれ・・・

男、ロープを握ったまま肩を震わせている。

えふで 　　きつと何か別の、大きな力が働いてたんだと思います

男 　　・・・

えふで 　　ぼくもそうでしたから。

なにもできなかった

ここは、こんなぼくでもいることをゆるしてもらえる

多映子 　　親御さんに連絡したら　しばらくそちらで預かってくださいって

でも時々家は帰るんだよね

えふで 　　荷物を取りに。高校は、もう、ドロップアウトしてもいいんです

中卒でも、別に　もうあそこに戻りたくないから

芳子 　　よしひろ・・・わかる？

みんな生きようと思ってここで一緒に生活してるんだよ。

あんたも本当は気づいてほしかったんだよね？

男 　　わからない

芳子、男を優しく抱きしめる。

芳子 　　ごめんね　こんな母さんで

男、芳子突き飛ばす。

男 　　母さんのせいじゃない！父さんが悪いんだ！

そうだろ母さん

芳子 　　敏夫さんのこと　悪く言わないで　あなたのお父さんじゃない

どうしてそんなこと言えるの

男 俺は何も間違ってたはずだ・

芳子 お父さんみたいに、なりたくなかったのよね

多映子 よしくん 何か思い出したの

男 ・ ・ ・

多映子 ごめんね。おせっかいだよね。

でもこれだけ言わせて。嬉しいときに怒ったっていいの。

楽しいときに泣いたっていいの。

それがあなたのほんと、なんだからね

男 なんでそんなに

多映子 ん？

男 俺が父に似ているからですか？

多映子 違う。あたしはね、ただの自己中な女だよ。

あたしは神様でも、マザーテレサでもない。

ただ、この「まあぶる」を、この暮らしを愛してるだけ。

さ、みんな騒がせちゃったね。

あつたかいお茶でもいれるから、もうひと眠りしよう。

多映子、住人を引き連れて家の中へ戻る。

庭先に佇む芳子と男。

芳子、木の下に転がっている椅子に触れて、

芳子 逝かせないからね、あんたのことは

あたしより先になんて 逝かせてやらない

もしあんたが先に逝くことがあるのなら、

母さんと順番変わりなさい

わかったわね よしひろ

間。

男、まだ輪っかになって木の枝にからみついているロープを見上げる。

男 父さんはこっから何が見えてたんだろうな

芳子 たぶん 何も見えなかったのよ

だからその輪っかをくぐれた

男 そうか・

芳子 みせるんじゃないかった



男 え

芳子 (木の枝にからみついているロープをほどきながら)

まだ小さかったからなにもわからないだろうって思った  
でもそんなわけないよね

男 ……

芳子 ね、肘のそこ、すりむいてる。手当てしてあげるから、

おいで

芳子、椅子を運びながら男を見つめる。2人、家の中へ入る。  
空が白んでいく。

【3場】

朝、住人たちは起き出し、奥の部屋から出てくるといつものように居間に集い、  
各々、自分の好きなことに没頭し始める。

多映子と男、机の上に色々な道具を広げながら、喋っている。

多映子 よしくんの名前はね・・・どうしよっか。

よしくん、したいことある？

べつに

多映子 いろいろあるのよ

粘土でしょ、編み物でしょ、押し花、彫刻だってできる

なんか、趣味とかはないの

ないです

多映子 意外にね、挑戦したことないやつが、しっくりきたりするのよ

みんなそうだったわよ

ミソラさんはもともと歌が好きだったんだけど

母さんは なんかやってるんですか

多映子 芳子さんはね、私のお手伝いしてくれてる 家事全般

できるときにできるだけ でもそれも立派なしごと

だから つけないんですか名前

え

男 母のこと 芳子さんって

多映子 芳子さんはだって、本当に妹だから

男 血 繋がってませんよね

多映子 そんな水くさいこと言って

男 このフォーク・・  
多映子 どう？おばさんが作ったのよ

男 器用ですわね  
多映子 器用貧乏よ

でも食器はね ほら、木って優しい感じがするじゃない  
だからいいなあとと思って 作ってみた

男 下手にフォークとか持たせたら 危ないですもんね  
多映子 え

男 ここにいるひとたち。包丁とか、そういう、なんていうんですか、  
鋭利なものとか、あれでしょ

多映子 私はただ  
男 大丈夫ですよ。うちの母も、そうでしたから。

一時期ひどくて、家中の凶器になり得るもの  
全部隠したり 捨てたから

多映子 そうだったの

間。

男 外に、畑もありましたね

多映子 あれは飾りみたいなものよ。

ここではね、別に自給自足の生活ってわけじゃあないの  
よく作業療法って聞くじゃない

あれで、野菜育てたり、鶏を飼うの、  
私このひとたちにさせたくないの

ていうか、できないですよね そんなこと  
自分のお世話でいっばいっばいな人たちが

多映子 よしくん やめて

・・うん、まあもちろんそれはある。おばさんもそれは認める。

あのひとたちだけに野菜を作らせたら枯らしちゃうのは当たり前  
水をあげられない日だってどうしてもあるだろうから

男 で、あなたのいう作業療法とやらは  
芸術の真似事をさせることなんですか

多映子 とんでもないよ。あたしは医者免許もまして作業療法士の資格も  
もってないのよ。ただ、好きに過ごさせてあげてるだけ

好きなのよ 何か表現しようとして熱中している人間が

男 ・・表現、ねえ

男は、居間をぐるりと見渡し、一番近くにいたれんずのもとに歩み寄る。  
れんずは写真を床に広げて、アルバムを作ろうとしている。  
傍らには一眼レフのカメラが置かれている。  
男、思わず手に触れようとし、

れんず 触らないで

男 なんだよ どうせお前んじゃないだろ

れんず あたしのだよ

男 こんなごっついなの？

あれか、今流行りのカメラ女子ってやつ

違うのよ それはね

やめてください

ミソラ あら どうして

れんず 思い出が壊れちゃうから

男 はあ？

れんず ほつといてよ

多映子 そのカメラはれんずちゃんしか触っちゃいけないの

よしくん、わかるわね

男 ・・・

スミ おおい、多映子さん

多映子 どうしたの

スミ そろそろ墨汁がなくなっちゃまいそうなんだ

多映子 あら じゃあ買ってくるわね

他の人は なにか欲しいものある？

えふで あ、じゃあぼくは絵の具を

多映子 わかったわ

ミソラ 今日、お買い物いくの？

多映子 ええ お天気もいいし運動がてら

男 そういえばこの運営資金とか、いったいどうして

多映子 さ、じゃあ日が傾かないうちに私は買い物行ってきます。

ミソラ 行ってらっしゃい

男 街に行くなら、俺も・・

芳子 よしひろはお母さんのこと、手伝ってちょうだい。

男 いや、でも

多映子 そうそう 言い忘れたけどよしくん

ここにはいくつか決まりがあるから。

まず、「街」に降りるのは私だけ。だから何か欲しいものがあつたら私にいつて。えふでくんはたまに家に帰るけどそれはそれ。

「外」に出る時は必ず誰かとペアになっていくこと。

30分以上の外出は禁止。

スミ あと、風呂やトイレに行くときも自己申告な

男 外出するときはなんとなく分かりますけど、なんで風呂やトイレも察せよ。まああんまり長くいると心配されるぞってだけの話。

男 そんなに危ないですか

多映子 念には念をね。あと、2階には立ち入らないこと。

男 階段から落ちたりしないようにですか

多映子 あ、それは盲点だった。

スミ 昨日言ったろ、2階は多映子さんのプライベートゾーンなんだよ

男 はあ

芳子 基本的に私たちは日中はこの居間で、寝るときは奥の部屋を使うから。すぐ慣れるわよ

男 いや、まだ住むとはなにも

多映子 みんな、新入りさんに優しくね

ミソラ はい

多映子 それじゃ、いつてきます

芳子 いつてらっしゃい

スミ いつてらっしゃい

ミソラ いつてらっしゃい

れんず いつてらっしゃい

えふで いつてらっしゃい

多映子、 買い物に出かけていく。

芳子 よしひろ、ちゃんと挨拶しなさい

男 え

芳子 出かけるときは、「いつてらっしゃい」「いつてきます」  
帰って来た時は「ただいま」「おかえりなさい」

あと「いただきます」と「ごちそうさま」もね

男 窮屈だな

芳子 ここはそういう「家」なの

男 はいはい

芳子 今から洗濯物干すから、手伝って

男 ……俺さ、この粘土で何か作りたい

芳子 え

男 やっていいんだろ 好きなこと

芳子 ……そうね

ミソラ 芳子さん、私が手伝うわ 洗濯

芳子 悪いわ

ミソラ いいのいいの、せっかくやってみたいことができたんだから

芳子 じゃあ、お言葉に甘えて

芳子とミソラ、洗濯物を干しに行く。

部屋に残された男は、粘土を手取ることなく、スミの近くに寄る。

スミ お、なんだい なんかやる気になったかね

男、スミが書き上げた半紙をみて、

男 「一日一善」

スミ 声に出すなよ 恥ずかしいなあ

男 毎日なに書いてるんですか

スミ 徒然なるままにく心に浮かぶよしなしごとを…なんてな

男 絵も描かれるんですね

スミ ん？ああ、絵はまだあんまり描かないんだけど、最近はずっとな

男 汚いですね

れんず あんたなんてこというのよ

男 どうせゴミになるんですよ

間。

スミ ゴミ山から宝が見つかることもあるんだぜ？

男 なんですか宝って

スミ とても褒められたことじゃないけど、

ここに来る前、毎晩、

ファストフード屋から出される廃棄物にたかって、口に入れてた。

毎日食べれるわけじゃない。

朝、ゴミ収集車があんなに山になってたゴミ袋を、

綺麗さっぱり片づけていくのを公園でみていて、  
ああ、俺もいつかあんな風に

片づけられるのかなあとか思ったりはしたよ  
そういうことかい？

男 自覚あるんですね 自分が社会のゴミだっていう

れんず よくもそんなこと

スミ あるさ。

れんず スミさん

そんなやつ相手にしないで

スミ いや、いいんだよ。思うところがあるから話してるんだろう。

俺はあいにく、1人もんでね

親はとつくに死んでるし、兄弟は生きてんだかどうか。

女房はどっか行っちゃったし、

まあ、世の中を追い出されたみたいなものよ。

ま、こんな人間がいなくなっても、誰も気づきやしねえよ。

あの爺さん、最近見ねえな・・って思われるのが関の山

けど人様にだけは迷惑かけたくねえんだ

野垂れ死んだら、ケーサツとか来ちゃうだろ

男 あんたみたいになってまで生きてるやつの方がよっぽど恥ずかしい

スミ そうだな 恥ずかしいよない年して

男 結局自業自得ですよ あんたは逃げたんだ

スミ はは、そうだな これまでの人生ドブにドボン！だ

じゃあこれから先どうする？ってそんでここに来たんだよ

さあ、俺の話はした。お前さんはどうなんだ

男 会社のお荷物、ってやつですかね

仕事は終わらない 残業は当たり前

なのにタイムカードは9時と17時に押しておかないと

すぐ怒られた

上司の寝てない自慢

みんな頑張っているからお前も頑張れと言われる

誰も周りなんて見やしないで 前だけ見て走らされてる

少し休もうと列を抜けたら、もうそれは脱落だ

人は消耗品だから

働けなくなったら、社会のゴミなんだよ

スミ そんなの、この世に身売りした人間の言い分だ！

んじゃ仕事も家もない俺はなんだ？社会のゴミ以下？こえだめか？

男 芳子さんはどれだけ君のことをかけがえのない存在だと  
それは母からみた俺じゃないですか  
社会からの評価って全然別ですよ

男、えふでのもとに歩み寄って話し掛ける。

男 君さ、高校ドロップアウトしてもいいって言ってたよね  
えふで ・・はい

男 今でも通信簿に、○、△、×で評価されるのかな？  
まあ、されるよね アレ、会社でも同じだから。

えふで 全部○じゃないとすごく叱られました  
全部○なのが当たり前だと言われました  
男 何かが駄目だとすぐ×つけられるんだよ

えふで 無能な人間 使えない奴 ああそうさ俺はどうせ何もできない・  
ぼくも×ばかりだったと思います

男 ○つけてもらえるようなことした覚えはないから  
えふで へえ。そんな君がいじめに？  
・・・

長い沈黙。

えふで 僕は、殺されたっていいんです。

あ、ただ、血、どんくらい出るんだろうとか、  
痛いのがやだなあとは思いますが。

簡単にリセットできたらな、と思うんです  
たぶん僕は今の人生間違えちゃって、

男 だから、リセットするんなら早いうちがいいじゃないですか  
だつて今より駄目な人生なんてあるわけじゃないじゃないですか  
えふで リセットできるんならやり直してえよ俺だつて

えふで ある日ね、殺し屋が来て、僕のことを消してくれるんです  
それでね、僕はあなた誰に雇われたんですかって聞くんですけど

殺し屋は守秘義務だから答えられないっていうんです  
でもね、僕はなんとなく思い当たっているんです  
今更誰のことも恨んでないんですよ

むしろ、消してくれてありがとう！  
この世界が漫画みたいに紙の上で起きてることなら、

僕のことなんて消しゴムで、  
ゴシゴシやったら消えちゃうんですよ  
僕なんてまだ下書きの段階だからね  
で、消しかすは捨てられて、綺麗さっぱり、白紙に戻るんだ  
それって幸せですよ  
この世界 みんなそうなればいいのに  
今僕たちの頭上には巨大な消しゴムを持った  
巨人がいるのかもしれない  
僕たちは今まさに消されようとしてい――

えふで、小さく叫び声をあげる。

えふで　でも、そのときね、みんなすっごく笑ってるんですよ

ああ、楽しいのになって

でも、なんで笑えるのになって・・

笑うときって、どうしてたか、もう思い出せないんです

わけわかんなくなれたら、幸せだよな、幸せだ

俺もわけわかんなくなっちゃみたいよいつそ、なあ！

れんず　やめて！！大きな声出さないで

このひと　こわい

ちよつとよしひろ　なにしてるの

男　お話ししました

スミ　お前そんなことして楽しいのか

れんず　えふでくんにひどいこと言わないで

芳子　なに言ったの・・！！

えふで　いいんです　別に　気にしてませんから

男　俺が悪者なのか？こんな偽善たくさんだ

れんず　ちよつと来て

男　え

れんず　いいから

れんず、男を引っ張って庭へ出ていく。

スミ、えふでは自分の作業に再び没頭する。



【4場】

れんずと男が外に出ていくのと入れ違いに、多映子が買い物から帰ってくる。両手に重そうな買い物袋を提げている。

多映子 たいいま

芳子 おかえりなさい

ミソラ おかえりなさい

スミ おかえりなさい

えふで おかえりなさい

芳子 義姉さん、それ、重いでしょ。運びますよ

多映子 ありがとう。とりあえずこっちはここで

多映子、買い物袋を一つ、テーブルの上に置く。

多映子 こっちはお台所に

芳子 はい

多映子と芳子、台所へ向かう。

ミソラ、テーブルの上にある買い物袋をひっくり返す。

中身がテーブルの上に散乱する。

それには目もくれず、ビニール袋を手にしたかと思うとおもむろに頭からすっぽりかぶり、口を結ぶ。

横になって、くぐもった声で歌うミソラ。

ミソラ ♪楽しいことも つらいことも いつか空へ

のぼってゆくわ

過呼吸になり始めるミソラ。

なおも、歌い続ける。

だが、だんだん息切れして苦しくなってきたのか、ほとんど息だけになる。台所から多映子が飛んでくる。

多映子 ミソラさん！

多映子、ビニール袋を無我夢中で引きちぎる。

ミソラ、呼吸ができるようになると、深呼吸して、そのまま歌い続ける。

ミソラ ♪よるこび かなしみ いつもそばにいた

あの風のように自由に 心よ 飛んでゆけ

多映子 ミソラさん・・・なにしてた

ミソラ 見つかっちゃった

多映子 そうじゃなくて

ミソラ たまにね、生きていることが、わからなくなるの。

多映子 え

ミソラ だから、こうしてときどき、確認するの。

多映子 確認、ね

ミソラ 大丈夫。こんなんじや死なないから。

多映子 それ、捨てよう。

多映子、ミソラの首に巻き付いているビニール袋をとる。

えふでとスミ、黙って一部始終をみていたが急に口を開く。

えふで あ、新しい絵の具だ！

えふで、目を輝かせて絵の具を手取る。

スミ 良かったな、多映子さんいっぱい買ってきてくれて。

これでまた、綺麗な絵を描くんだぞ。

えふで はい 多映子さんありがとうございます

多映子・・・お夕飯の準備してきます

多映子、台所へ戻る。

【5場】

庭先。れんずと男が話している。

れんず ねえ、あなた何がしたいの

男 は

れんず 私たちはここで静かに暮らしてたいの。

みんなの和を乱さないで。

男 俺は別に

れんず あなたが来て、朝あんなことするからみんなめちやくちやだよ

顔には出さないけど あたしにはわかるよ

男 俺が憎いのか？

れんず これ以上みんなにひどいこと言うんだったらゆるさない

男 そんなに大事か

れんず 大事に決まってるでしょ！

多映子さんが悲しむ顔なんて見たくない

男 いちいち悲しんでなんてないだろ

れんず あんたは何もわかってない！

やっところまできたんだよ みんな

心ってね、あっけなく壊れるんだよ

ガラスみたいに、ちよつとしたことでヒビが入って、

パリン、てある日割れちやうの。

男 なるほど、守られてんのか おばさんに

れんず 誰も傷つかない暮らしが出来てるのは多映子さんのおかげ。

それをあんたがどうにかする権利はない。

ねえみんな爆弾抱えてんだよどうしてくれるのこれでみんなに

なんかあつたら・・・！

男 ・・・・知るか

れんず 知らないなんて言わせないよ。嫌なの。

大事な人がいなくなつちやうなんてもう想像できない

男 でも人はいつかなくなるだろ

れんず あんた人を好きになつたことないでしょ。

男 お説教かよ 聞きたくな

れんず あたしどんだけゆうくん愛してたと思う

男 あ？事故って死んだカレシか？ご愁傷さまだな

れんず 事故はゆうくんのせいじゃないじゃん！

あたし愛されてたんだよ 愛し合ってたんだあたしたち  
一緒に暮らしてごはんかかさず作ったし  
気のらなくてもセックスしたし

やりたいようにさせてあげてたんだと思うんだよ  
そりゃねいっぱい殴られたよ

でもそんなの痛くなかった

だってそんなときはゆうくん、あたしをみてくれてるじゃない  
むしろね、嬉しかったの

あーいまあたし、ゆうくん独り占めだーって思って  
なのね、なのになのに・・・

男  
お前さ

ひよつとして死んだらあの世で一緒になれるとか考えてんのかよ  
なれるわけねーだろ

れんず  
なんでそういうこというの なれるよ

なれなかったとしても、天国からゆうくんが見てるもん

ああ、俺の為に死んでくれたんだな、

命かけて俺を愛してくれてたんだなって

それを見せられたら、いいの

男  
自分勝手だな そりゃお前はなんとも言えるだろうよ

でもそいつはさ、お前にそう思われるの迷惑って思ってたりにして

れんず  
なにも知らないくせに！！！！

れんず、激昂して首から下げたカメラをとっさに首から外し、  
思いつき男の頭に振り下ろそうとする。

男  
やめろ！なにする――

れんず  
ああああ！！

れんず、喚きながら男を追いかけ、何度もカメラを振り下ろしてはよけられる。  
多映子がれんずの声に気づいたのか、庭先に飛び出してくる。

多映子  
れんずちゃん！！

れんず、その声にはっとして一瞬動きが止まる。  
しかし、感情は納まらない。

多映子、慌ててれんずの身体を後ろから抱きしめ、羽交い絞めのような格好になる。れんず、身体を震わせている。

れんず ・・ごめんなさい・・あたし

多映子 なにが

れんず あたし、悔しくって

多映子 うん

れんず ゆるせなくって

多映子 そっか

れんず でもね、あの人も苦しんでるんだって分かるんですよ。

なのにあたし・・

多映子 れんずちゃんは自分の心に従っただけだよ

れんず はい・・

多映子 ただ、カメラはあんな風に使ったらだめ

大事な人が悲しむよ

れんず ゆうくん・・

多映子 ね？

れんず ごめんなさい

れんず、カメラを自分の胸に抱きしめる。

多映子、れんずの頭を優しく撫でながら、

多映子 お茶飲んで、甘いものでも食べよう

ほら。よしくんも。

男 え、あ・・

多映子 女の子泣かせた罪は重いぞ なんてね

男 俺、やっぱり・・

多映子 いいから いらっしやい

男 ・・・

多映子、れんずを抱え込むようにして「まあぶる」へ戻る。  
男、とぼとぼとその後が続く。

【6場】

「まあぶる」の居間。

スミ、一心不乱に木炭を硯に押し付けて擦っている。墨の香りがあたりに漂っている。

一見和やかだが、どこか様子がおかしい。

ミソラは上機嫌でいつものように歌を歌っている。

ミソラ ♪あなたの「あ」の字を書きましよう

スミ うるさい

ミソラ ♪想い したため いとしさを

スミ 黙れクソババア！

ミソラ、怯えてえふでの近くに身を寄せる。

スミ、半紙に何かを書こうとしているが、ぼんやりとして、

その間に筆先からぼたぼたと黒い墨汁が垂れ、白い半紙に染みを作っていく。多映子とれんず、男はその光景を見ている。

多映子 スミさん

スミ、聞こえていないようで、次の瞬間、筆にたつぷりと墨汁をふくませ、

半紙にめちやくちやに書き殴る。

書き殴りつづける。

黒い水たまりが紙の上に見える。

スミ 真っ暗だ・・・お先真っ暗

俺は・・・

スミ、黒い水たまりの上に手をついて、肩を震わせている。

スミ 誰が俺を覚えていてくれるんだ？

誰がいつたい、俺がいなくなつて困ることがある？

誰も、誰もだ、誰もいない・・・

ほんとになあ、

この身体ごと綺麗さっぱり消えちまえばいいのになあ。

多映子 ずっとここにいたらいいじゃない

スミ 一人でいたいときだつてあんだろ

一人になりてえんだよ

多映子 もう俺は出てく また宿なしになるよ  
あなたが邪魔だなんて言ったことない

どうしてそんなこというの

スミ 俺は・・・ゴミだからだ

多映子 なによそれ

スミ いやなんでもない

多映子 自分の価値は自分が決めるの。

自分を粗末にしたらそういう自分になっちゃう

そうになりたいの

スミ いや、違う

まあなんか ただここに住まわせてもらうのも悪いような気がしてよ  
こんなぬくい布団とちゃんとした飯も食えて

もうそれだけでもありがてえつつうのに

いやあ、ほんと 多映子さんはねえ

なかなか人にはできないことをやっていると  
思うよ

人間まず食う寝るところに住むところ

それがねえと生きてけねえからな

多映子 今までそれがなかったんだから ここで充分に満喫してよ

食う寝る住むをさ

それがあたしへの恩返しかな

スミ 恩返しって・・・

多映子 ごめんね、ずるいこと言つて

スミ ・・・・

多映子 父さん

スミ え？

多映子 ううん、なんでもない

さ、これ片づけようか ええと拭くものないかな

えふで 雑巾 持ってきます

えふで、 台所へ雑巾を取りに行く。

ミソラ あら、あたしも手伝うわ

多映子 あ、ミソラさん れんずちゃんにお茶を

ミソラ え ああ

れんず すみません、自分でやります

ミソラ いいのよ 私も喉乾いちゃったし

一緒に飲みましょ

れんず ありがとうございます

多映子 台所の一番右の戸棚にね、お饅頭あるから

ミソラ まあ素敵

れんずちゃん、ちよつと待ってて

れんず あ、私もやりますから

ミソラ、れんず、台所へ行く。

えふで、雑巾をもつて戻ってくる。

スミ ああ。すまんね

えふで いえ、僕もよく絵の具こぼしちゃいますから

スミ けどよ

えふで あの、僕、この墨の香り、結構好きです

なんか落ち着くっていうか

スミ ……おう

えふでとスミ、居間で半紙を片付け始める。

男、奥の部屋へ入る。

多映子も男の後を追い、奥の部屋へ入る。

男 俺もう帰ります

ここは俺には合わない

多映子 帰るってったって、アパート解約したんでしょ

どこに帰るのよ

男 大人なんです、その辺はなんとでも

大丈夫です 死にはしませんから

多映子 お金持ってないでしょ

男 持ってます

多映子 ほんとに？

もう構わないでください

多映子 構うわよ 悪いけど

男 母はああ見えて平気です 1人にしたって

多映子 そういうことじゃない もちろん芳子さんのこともあるけど



男 じゃあなんですか

多映子 あなたが、心配なの

男 なにがですか

多映子 疲れてるでしょ

男 もう充分休みましたので

多映子 嘘

男 全然元気です

多映子 嘘

男 お世話になりました

多映子 ねえ、何が足りないの？

男 ・・・え

多映子 これまでいっぱい頑張ったんだからさ、

いっぱいラクしてつてよここで。

おばさん、料理はあまりうまくないかもしれないけど、

なるべく美味しいもの食べさせてるつもりだし、

嫌なことはいしなくていいし、

欲しいものがあれば買ってあげる。

だからさ、出てくのはやめよう？

男 なんでそこまでするんですか

母さんのため？それとも何かあるんですか？

こんな男置いといても何のメリットもありませんよ

多映子 違うの！

あのね、人のこと損得勘定したことないから。

もつと単純よ。おばさん単細胞だから。

ただね、よしくんともつと過ごしたいの。

男 は？

多映子 わかんない、わかんないよ、

でもね、たぶん、敏夫と過ごしてやれなかった分、

あなたと一緒にいたいんだと思う。

男 俺は父さんじゃないですよ

多映子 知ってる

男 どうかしてます

多映子 知ってる

2人の間に沈黙が続く。

えふでが奥の部屋に入ってくる。  
虚ろな目で男に視線を遣る。

えふでは、男に話し掛けているのか、虚空の一点を見つめながらぶつぶつとつぶやいている。

えふで

眠い・・眠りたくない・・

ぼくこのままだと知らない間に

あの世にいつてるんじゃないかなって思ったんですよ

夜眠るじゃないですか 眠るときって意識なくなるじゃないですか

その、自分がなくなるってことが

ぼくはすぐくこわくて

今まで何百回何千回と 眠ってきてたはずですよねぼく

なのになんで急にこんなこと考え始めたんだろうって

思うんですけど

でもなんかこんなこと考え始めると

とても眠ることなんてできないんですよ

目を閉じるとよくわかんないこと 考えちゃうし

みんなやつぱり誰か一人を敵にすれば

敵を作ればそれと戦うために人ってまとまると思うんですよ

ぼくはその敵になることでクラスがまとまるんだったら

それもいいのかなんて思ってたんですけど

でもじゃぼくは 誰かの 敵になるために生まれてきたのかって

そうじゃないだろうって思ってた・・

でも今更もうどうしようもないんですよ

別に家では普通ですよ

普通に「いつてきまーす」って言って家出て

ただいまって言って帰ってきて

食卓の上に用意されたごはんたべます

適当についてるテレビみて なんとなく家族と喋って

自分の部屋戻って また朝「いつてきまーす」って言って

そういう感じですよ

多映子、黙ってえふでの布団を敷き、部屋の電気を消す。

暗い中で、なおもえふでは何かを喋りつづけている。

多映子が静かにえふでに声をかける。

多映子

人は、毎晩眠りにつくときに、その日の自分と共に死ぬの。

それでね、朝起きて、またその日の自分と共に生まれて生きるの。

だから、おやすみ。明日生まれたえふでくんがどんな絵を描くのか、おばさんに見せてね。

しばらくの沈黙のあと、

えふで

おやすみなさい

えふで、多映子に敷いてもらった布団に横になると、糸がぷつぷつと切れたように眠る。

多映子、部屋を出ていく。

男、取り残されていると、部屋に静かにミソラ、スミ、れんず、芳子が入ってくる。全員、押入れから自分の布団を出すと、敷いて横になる。

芳子、黙って男の分も布団を敷いてやると、横になる。

男、静かに横になる。

夜が更けていく。

【7場】

早朝に近い深夜。男はあまり眠れなかったのか、そつと部屋を抜け出す。喉が渴いているのか、台所へと向かう。  
多映子がそこにいる。

男 なにしてるんですか

多映子 朝ごはんの仕込み

男 こんな早く？

多映子 早起きは三文の徳なり

男 早起きって時間でも

多映子 よしくんは

男 ちよつと喉乾いたので

多映子 そ

多映子、何やらゴソゴソとゴミ袋に詰めている。

男 なんですかそれ

多映子 ゴミ捨ていくの

男 ここで生活してて、そんなにゴミ出ます？

多映子 まとめて捨ててるのよ

男 お酒・・

多映子 なあに

男 多映子さん、なんか酒臭くありませんか

多映子 ああ、さつき料理にお酒使ったからじゃない

お魚煮込むのに、やわらかくなるのよ

男 ちよつと待っててください

男、多映子がまとめているゴミ袋を掴む。

すると、袋がほどけて酒の空き缶や空き瓶が転がってくる。

男 どう見ても料理酒じゃないんですけど

多映子 ・・・

男 この人たち、飲みませんよね

多映子 ・・そうだね

間。

多映子 よしくんさ

男 はい？

多映子 見せたいものがあるの

多映子、男を手招きして、2階の階段を上がっていく。

男、いぶかしみながらも多映子を追って階段を上がっていく。

2階の多映子の部屋。

中には、何本もの酒瓶とビールの空き缶が転がっている。

多映子、床に置いてあるビールの缶を拾い、ぐいっと飲み干す。

多映子 よしくんも、呑む？

男 いえ

多映子 ねえ、このことみんなには内緒よ

男 えっ

多映子 ここ、私の部屋は誰も入れないようにしてるから。

昔からお酒だけはやめられなくてね、毎晩の楽しみよ。

男 なんで隠してるんです

多映子 お酒、たばこ、刃物、ここは禁止だから。

男 お婆さんだけ、ずるいんですね

多映子 これくらい許してよお

男 いや別に いいですけど

あ、見せたいものって

多映子 ああ、それ、

多映子が指さした先には、壁に飾ってある一枚の絵がある。  
家族の肖像のようである。

男 お婆さんが描いたんですか

多映子 ううん 敏夫が

男 父さんが？

多映子 知ってた？敏夫、小さいころから絵描くのが好きだったのよ。

高校でも美術部に入ってたね。そのときに。

男 ・・もしかしてですけど、これ、じいちゃんと

多映子 そう。父さんと母さんと、私と、敏夫。

男 見てるとね、元気が湧いてくるのよ  
ずっと飾ってるんですか

多映子 そうよ。昔ね、敏夫が言ったの  
姉ちゃん、俺は才能ないから絵描きにはなれないけど、  
でも好きだから、絵は描いていこうと思うんだ

それで将来 脱サラしてアトリエでも開いてなんて、よく話したわ  
就職してからはさっぱり描いてなかったみたいだけど

男 ・・・あの、やっぱり僕も飲みます

多映子 どうぞ

多映子、男にビールの缶を渡す。

男、受け取り缶を開け、喉を鳴らして飲む。

多映子 初めてかなこうやって一緒にお酒なんて

男 いや、法要のとき

多映子 ああ そうだったっけ？もう覚えてなくてあんまり

男 立て続けでしたもんね、じいちゃんとはあちゃん

多映子 あっけないもんよね

俊夫が死んで、もちろん、生活は変わらないわけだけどき、

でも、仏壇に俊夫いるでしょ、いい顔してんのよそれがまた。

なんのときだったかなあの写真

男 実は僕も、一番覚えてるの、仏壇で笑ってる父の顔かもしれません

多映子 よしくんほんと小さかったからねえ。

男 母からは、お父さんはいないのよって聞かされてましたから

多映子 芳子さん、やっぱり隠すよね

そりやそうだよ

私も、御兄弟はいらっしゃらないの？なんて聞かれた日にはね、

男 でも自然と知りました。

なんていうか、周りの人が

多映子 うん、いくら身内が隠してもね、ご近所さんにはバレバレだからね

男 自分からは言えなかった

言っちゃいけないことのような気がして

沈黙。

2人、ごくごくと喉を鳴らしながらビールを飲む。

多映子 あたしあの日の前日にね、

姉さん、元気？敏夫ですって電話あったんだよ  
男 なに話したんですか

多映子 別になんてことない世間話よ。

今思えば・・・あれがサインだったのかな

男

多映子 もうさ、誰にもいなくならないでほしいんだよ

ここは楽園よ 父さんも母さんも芳子さんも、子供たちもいる  
それによしくんも

男 いつまでも楽園でいられますか

多映子 みんなが笑ってくれたら、あたしはしあわ・・

男 でもめんどくさいでしょ。この人たち。

一緒にずっといるわけだから。あーこいつらメンドクセー、  
なんもしねーで3食食ってるごくつぶしがとか思わないんですか？

多映子 家族にそんなこと思わないよ

男 でも

多映子 あたしにできることってなんだ

男 え

多映子 よしくんは考えたことないかな、自分になにができるのかって。  
もちろんね、やりたいことと、できることは違うよ。

でも、でもさ、なにもできなかった自分で 一番許せないでしょ

多映子、床に額をこすりつけるように突っ伏す。

全身を震わせている。

多映子 (くぐもった声で)

勝手にいなくなつて。さよならくらいちゃんとしてよ。

なんで。なんで。なんでよ・・・

多映子、泣いている様子。

次第にそれは怒りの声に変わり、何かを叫んでいる。

叫びはやがて、乾いた笑いに変わり、

多映子は無理やり笑顔を作つて、やっと顔をあげる。

男 おばさん・・

多映子 あーやだやだ。暗い顔してたらみんなも落ち込んじゃう

あたしは元気で、笑顔でいないとね

男、何か言いかけようとするも、多映子にさえぎられる。

多映子 よしくんたら、顔真っ赤。

男 え

多映子 あんまり強くないのね

男 え、あ、はい。飲めないんですあまり

多映子 やっぱり敏夫の血だなあ

多映子、残っていたビールを飲み干す。

男 おばさんも お酒あんまり強くないでしょ

多映子 そんなわけ ザルよザル

男 こんなに飲んで・・

多映子 さあさ。おばさんの話は終わり。

皆にバレないように、寢床に戻んなさい。

男、そつと多映子の部屋を出、階段を降りて皆が寝ている部屋へ戻る。

多映子、一人になった部屋で、じつと敏夫の描いた家族の肖像画を見つめていく。

溶暗。

### 【8場】

朝。

快晴。

庭先でえふでがイーゼルにキャンバスを置いて絵を描いている。

まあぶるの住人たちはその周りに集まっている。

芳子 たまには日差しを浴びるってのもいいものね

多映子 みんなで日光浴しないと

ミソラ おひさまのにおいね

れんず あったかい

スミ ここんとこ変な天気で頭が重かったからなあ

今日は良い日だ



男、手で日差しをよけている。

多映子 よしくん、どうしたの

男 まぶしくて

多映子 こわい？

男 えっ

多映子 おひさま

男 いや、ただちよつとまぶしくて・・・

スミ 俺たち日陰者にはつらいよなあ！

男 なんですかそれ

スミ いや、そう思ってるんじゃないかと思って

ミソラ ♪た〜いようを〜てのひらに・・・かざしてみれば

れんず ちよつとミソラさん、それ違う

ミソラ あら？こんな歌あつたわよね？

芳子 手のひらを太陽に、じゃない？

多映子 あはは、でも太陽を手のひらにかざしてみるってのも面白いわね

ミソラ、手のひらを上に向けて、両手を広げる。

ミソラ こうしてると、おひさまからなにか、もらえる気がするの

芳子 それ、ちよつとわかる

スミ もらおうもらおう！もらえるもんはもらっとけ！だ

れんず パワー、分けてもらえますかね

多映子 きつともらえるよ

ミソラ、芳子、スミ、れんず、多映子、

各々深呼吸をし、空に向かって両手を広げる。

空を見上げ、日光を浴びるひととき。

皆、どこか安らいだ顔をしている。

多映子 れんずちゃん、今日はいい写真が撮れるよ

れんず 何を撮ったら・・・

多映子、えふでがパレットに溶いた絵の具だまりを見る。

そこには色々な色が混じり合ってまだら模様になっている。

えふで 混ざっちゃいました・・作り直しだな

多映子 待って すごくいいじゃないこれ

えふで え？

多映子 ほら、こうやって、このまま紙にのせてみて

えふで わ・・あ・・

ミソラ 綺麗なまだら模様

スミ 「まあぶる」ってんだよ、こういうの

えふで まあぶる？

スミ そうだよ こういう、色んな色が溶けて混じってるやつのこと

れんず あたしたちって何色なのかな

ミソラ あたしは黄色が好きよ 元気が出るから

れんず 多映子さんは 何色に見える あたしたちのこと

多映子 まあぶる色。

えふで え

多映子 人間はみんな、まあぶる。

優しさの色が濃い人、欲の色が濃い人・・

均等に塗られてる人なんていないの、まだらよ。

時々薄いはずのどこかが濃くなっていたりもして・・・

なんちゃって、ね

スミ ああ、どす黒い俺よ。どす黒い俺をゆるしたまえ。

ミソラ 透明なわたしに、色んな色を塗ってちょうだい

れんず ・・カラフルな世界

芳子 まるで、波ね

えふで、キャンバスに筆で絵を描いていく。

その姿は、どこか踊っているようにも見える。

キャンバスには、色々な色が混じり合ったまあぶる模様が一面に描かれている。

多映子 よしくん、みてごらん

多映子、男のかざしていた手をそっと外させる。

男、まるで世界を初めて見たかのように、ゆっくりとまばたきする。

絵の前に立ち、つぶやくように、声を絞り出す。

男 ……きれいなものかもしれない

れんず あの  
えふで はい  
れんず これ、写真、撮ってもいいですか  
えふで え、あ、

れんず、えふでが頷いた次の瞬間には夢中でシャッターを押している。  
まるでせき止めていた何かが流れていくかのように。  
多映子、優しい表情でそれを見つめている。

多映子 れんずちゃん  
れんず ……

多映子 ねえ、せっかくだからさ、みんなで撮ろうよ

れんず ……いいですね

多映子 じゃあ、この絵を真ん中に！

ほら、もつと寄って、

スミ 集合写真で、なんか恥ずかしいな

ミソラ 大丈夫、魂は抜かれませんよ

芳子 よしひろ、ほら、いらっしやい

男 俺はいいって

れんず 皆さん、良い感じですよ その位置で

えふで れんずさんは

れんず 私は、撮るから

多映子 タイマーかければいいじゃない

れんず え、でも

多映子 みんなで撮りたいの れんずちゃんもさあ、入った入った

れんず わかりました、

れんず、カメラのタイマーをかけ、急いでみんなのもとにかけよる。

全員が揃ったところで、カメラのシャッターが切られ、時間が閉じ込められる。  
次第に陽がかげつてゆき、男と芳子が2人で庭に佇んでいる。

男 どうしてさ、

芳子 うん

男 どうしてみんな、普通に接してくれるのかな

芳子 普通？

男 俺、このひとたちに、ひどいことばっか言ったんだ  
殺意湧くよな普通

芳子 馬鹿ね みんな、あんたが苦しんでいるの、知ってるから

男 俺を殴りでもすれば良かったのに・・・

芳子 できないよ、そんなこと

間。

男 俺は、父さんみたいなことしたくなかった

芳子 母さんもよ

男 え

芳子 でもね、何度もためらった

男 母さん

芳子 敏夫さんがね、夢枕に立つの

ただ、薄く微笑んで、それで、

敏夫さんの周りには大きな光の輪っかがあるんですよ・・・

とてもきれいで、思わずね、私も吸い込まれてしまいそうだった・・・

間。

男 昔さ、俺がまだ小学生の頃、母さんが突然、

ドライブに行こうっていったの覚えてる

それだけ言って、俺を車に乗せて、ひたすら車を走らせて、走らせて・・・

あんときの母さんの横顔、すごくこわかった

俺、母さんと、人間が住んでる世界じゃないところに、

このままいつちやうのかなって、すごくこわかったんだよ

芳子 ・・・・ごめんね。でも、ありがとう

男 え

芳子 よしひろ・・・今年いくつになったんだっけ

男 33

芳子 そう・・・もう父さんを越したんだね

山間に夕陽が落ちていく。

それを眺める男と芳子の影がのびていく。

芳子 明日もまた、一緒に夕陽を見よう

男 明日は雨が降るかもしれない

芳子 そしたら、その次の日に

男 その次の日も、雨だったら

芳子 雨が上がるまで、いくらでも待つわ

だからまた、夕陽を見よう

男 ……うん

急に夕立がばらばらと降り始める。

次第に大粒の雨となり、親子に襲い掛かり、

男と芳子は身を寄せ合うようにして雨に打たれる。

溶暗。

### 【9場】

明かりがつくと、2階にある多映子の部屋に、男と多映子がいる。

中には、何本もの酒瓶とビールの空き缶が転がっている。

壁に飾ってあった家族の肖像画の隣に、えふでが描いた「まあぶる」の絵が新たに飾られている。

多映子、ビールをぐいっと飲み干す。

男 飲み過ぎですよ

多映子、壁に寄りかかり、

多映子 おばさんね、疲れちゃったのよ・

ほんの少し、眠るだけだから。

すこし、すこしだけ、ね、眠らせて・・・

男 なんでこんなになるまで一人で頑張ってたんだ  
所詮は他人だろ

多映子 いんだよ それでも

ここで一緒に生きてたのは ほんとなんだから  
それさえあればい・・・

多映子、突然胸を押さえて倒れ込む。

男、驚いて駆け寄る。多映子、荒い息で尋常ではない様子。  
男、何かを察知し1階に降りようとする。

多映子 どこいくの

男 誰か呼ばないと

多映子 いいんだよそんなのは

多映子、男の足首をぎゅっと掴む。

多映子 心臓が悪いの。もともと。こんないつもの発作・・・

多映子、さらに胸を強く押さえる。

多映子 人間の身体はね、いつか死ぬように出来てるのよ

・・・まだ生きれるのに、殺しちゃ、  
もったいな・・・

多映子、小さく呻いて絶命する。

横たわる多映子の前で男が呆然としていると、

住人たちがぞろぞろと2階に集まってくる。

無言で、ぺたぺたと多映子の身体を触っていく住人たち。

長い沈黙の後、住人たちは多映子の体を持ち上げ、運んでいく。

その後から、まるで遺影のように、家族の肖像画と、「まあぶる」の絵をそれぞれ持ち、男と芳子が続く。

舞台上から、多映子は消失する。

【10場】

多映子の死後。

舞台中央にある輪っかが、ゆらゆらと揺れている。  
その輪っかをまるで抛り所にするかのように、  
ぼつり、ぼつりと居間に集まる住人達。

芳子 ……知らなかった

ミソラ あんなに、元気だったのに

スミ 気づかなかった

れんず 話してほしかった

えふで こんなことって、あります

芳子 よしひろ、それは

男 おばさんの

男、小さな手帳を持っている。

ぱらぱらとページをめくりながら、読む。

男 3月4日。妹と暮らし始める。

6月14日。母さんを見つけた。

8月1日。父さんを迎えました。

11月28日。娘ができる。

2月17日。息子もできる。

5月7日。私のおとうと

芳子 おとうと

男 5月7日

沈黙。

男 父さんの命日だ

住人たちは、いつの間にか男を囲むように歪な輪の形になっている。

ミソラ 多映子さん  
えふで 多映子さん  
れんず 多映子さん  
スミ 多映子さん  
芳子 多映子さん  
男 多映子さん

輪っかが、揺れている。

一人一人、まるで天井からぶら下がった自分がそこにいるかのように、自分の「輪っか」の虚空を見つめる。  
そして、つぶやくように語り掛ける。

ミソラ あんたもういい加減、ここまで生きてたら充分よって思ったのよ。  
子供、何人も生んで育てて、一時期は38キロまで痩せたよね。  
でも気づいたらあたししかいなくなってた。

今まで人の世話ばかりで、  
あなたのお世話、ちゃんとしてあげれてなかったね。  
ねえ。ここへきて、歌って、わかったの。  
あんたは、「死にたい」ほど侘しかったんじゃないですか。

えふで 君のことは大嫌いだったよ。顔もいまいちだし、背だって低い。  
こんな高い声に生まれたのも、すごくやだった。  
みんなに馬鹿にされて、アザだらけで、とても見てらんないよ。  
でもね、なんにもできない君にも、できることがあった。  
絵を描くこと。うまいかへたかはわからない。

キャンバスにむかっていると、一番楽しそうだったね。  
君は、「死にたい」ほど苦しかったんじゃないだろうか。

れんず あなたは心はずっと穴が開いていた。  
その穴をゆうくんで塞いだ気でしたら、空っぽになっちゃったね  
だけど空っぽになったから、分かったよ。  
写真で、シャッターを切った瞬間、そこに「心」が生まれるんだね。  
この人たちと話しているとき、なんだかシャッターを切るあの瞬間と  
似ていたの。不思議ね  
あたしさん。



「死にたい」ほど寂しくて仕方がなかったんじゃないの。

スミ

お前は本当に、世間様に顔向けできねえ生き方してきたよな。年中咳き込んで、熱だして、泥棒みたいなことまでやってさ。お前になんて近づきたくなかったよ。

でもよ、そこまでしてしがみついたお前は偉いんじゃないのか。

習字のセンセイみたいに綺麗な字も、ありがたい言葉も書けないけど、墨にお前が浮かび上がってくるもんなんだな。

なあ。「死にたい」ほど悲しくて、

悲しみにくれていたんじゃないのか。

芳子

芳子。

夫が死んだのに、お腹が空くことが、ゆるせなかった。

夫が死んだのに、テレビを見て笑ってる自分に気づいたとき、

妻失格よって思った

誰も責めてくれないから、私が芳子、

あんたを責め続けるしかなかったの。

でも芳子はすぐ壊れちゃったね。ずっといじめ続けて、ごめんなさい。

「死にたい」ほど色んな感情が湧き出して、疲れてしまったんだね。

男

俺。そこにいる、俺。

こわかったよな。逃げたかっただろ。

でも俺はお前を無視して、お前を引きずって、会社に行ってた

「もうやめよう」って、「おしまい」だよって、お前は叫んだ。

すぐくうるさかったから、「死のう」って言ったよな。

だから俺は頷いた。

でも、嘘だった。お前はすごく抵抗した。

俺はお前を殺すだけの気力なんて、もう残ってなかった。

お前は笑った。

(男、天井から下がっている輪っかに手をかけ)

お前、生きていけるのか。

・・いや、もうあとは生きるだけだ。

男は輪っかを力の限り引っ張ると、紐は解け、床に落ちる。

男と住人たち、落ちて解けた輪っかを見つめると、  
踵を返し、各々の道を歩き出す。

舞台、暗くなっていき——幕。